

科学者フロイトの人文学——精神分析における宗教論に即して——

網谷優司（京都大学）

精神分析学の創始者であるフロイトは、自らの学説を科学的世界観に寄与するものと考えていた。彼にとって、「科学」と「宗教」は決して相容れるものではなく、科学が人類の未来に最良の希望を与えてくれるのに対して、宗教は人類の神経症的遺物であり精神分析の発展によって克服されるべきものであった。

しかし、フロイトのそうした表向きの言明とは裏腹に、彼の精神分析理論が様々な点で宗教論と交差し、キリスト教やユダヤ教の究明が試みられていたことは注目に値する。そうした宗教研究の原動力は、フロイト自身のユダヤ人意識であると考えられる。フロイトはいわば科学主義者であり、ユダヤ教も含めてどんな宗教も信仰しなかったが、一つの宗教を信仰していることと、その宗教から影響を受けていることは、おのずと水準の異なる問題であろう。

本発表では、時代順にフロイトの精神分析の展開を追いながら、そこに垣間見られるキリスト教やユダヤ教からの影響を析出する。

まず、内的なユダヤ教信仰を続けながら、ドイツ世界に同化しようとしていた父の「どっちつかず」な態度に翻弄される中で、ユダヤ教の啓蒙運動ハスカラの影響から、ドイツ主義運動をユダヤ性優位のもとに統合しようとした結果が、フロイト初期の記念碑的著作『夢解釈』（1900）であったことを明らかにする。

次に、ユングが精神分析の看板を背負うことになったいきさつや、その後のフロイトとユングの決裂の背後に二人の宗教観が大きくかかわっていたことを指摘し、フロイトの精神分析理論の基底を、ユングの分析心理学との比較から浮かび上がらせる。

最後に、フロイトの遺著『モーセという男と一神教』（1939）から、フロイトが精神分析を用いて一神教成立のメカニズムを再構成するなかで吐露するユダヤ人観を掬い上げる。

このような作業を通じて、フロイトの精神分析学は、フロイトが固執した科学主義的世界観からずれた境地、すなわち、人文学の領野を内包するものとして発展してきたことを明らかにしたい。